

LECTURE

講演会報告

- ビジネス学部主催
「小売業の消費者支持率の変遷と卸売業の支援
～菓子卸売業における売り場活性化をケースに～」
- 東洋大学経営学部教授 菊池宏之氏
- 10/15 長久手キャンパス



食料品の売り上げが年々減っている今日、スーパーは激しい価格競争を繰り広げており、低価格を実現するために正社員比率を引き下げ、人件費を圧縮するなどの努力を続けています。このような厳しい環境の中でスーパーが成長をとげるには、商品を卸している卸売の協力が不可欠です。本講演では、食品流通研究の第一人者である菊池先生をお招きし、スーパーの菓子売場を例に、卸売業とスーパーとの間に見られるパートナーシップの実態についてお聞きしました。

菓子は若者が好むチョコレート、スナック菓子から、子供が好む駄菓子、お年よりが好む米菓にいたるまで、品種の幅が広く、しかも商品の改廃が激しい(年間4000もの商品が発売されるが、1年後に残るのは40程度しかない)ため、売り場作りが大変難しい。季節感や対象年齢を意識した売り場作りや、CMキャンペーンに合わせたタイムリーな特売など、きめ細やかな売場管理が必要であるのに、単価が低く量が多い菓子売り場は「おいしい売り場」ではないため、マンパワーを投入できないのが実情。そのジレンマから抜け出す上で、いかに卸売の協力が有効な解決策となっているかを、わかりやすく説明いただきました。

- ジェンダー女性学研究所主催
「少女マンガにみるジェンダー
＜男装の少女＞はどのように描かれたか」
- 専修大学人文科学研究所特別研究員 押山美知子氏
- 10/23 星が丘キャンパス



今回の定例セミナーでは、日本の少女マンガを研究されている押山さんを講師にお招きしました。押山さんは、少女マンガとジェンダーが密接に関係しているという観点から、「リボンの騎士」「ベルサイユのばら」「少女革命ウテナ」の3作品を取り上げ、「男装の少女」というテーマで講演されました。

パワーポイントを利用した講演では、各作品の「男装の少女」が順次スクリーンに映し出され、マンガの構図や主人公の描写が、いかに細部にわたって描き分けられているかについて解説されました。一連の「男装の少女」は、男でも女でもなく、主體的な存在として描かれており、このような描き方を通じて、ジェンダー枠組みそのものに疑問を投げかけていると指摘されました。

「男装の少女」は、既存の少女や女性という定義に同調せず、一つの枠組みの中に抑え込まれない自由さを持ち続け、多様な描き方の可能性を見せつけたといえます。講演後、マンガの持つ魅力とジェンダー表象について、それぞれまたは双方に関心を寄せる学生から時間の経つのも忘れるほど、活発な質疑応答が繰り返されました。

- 文化創造フォーラム 多和田葉子講演会
- 作家 多和田葉子氏
- 11/9 星が丘キャンパス



左は本学教員で作家の諏訪哲史さん

多和田葉子さんは、ベルリン在住の小説家で、日本語とドイツ語で執筆を続けていらっしゃいます。1993年には「犬婿入り」で芥川賞を、2005年にはゲーテメダル賞を受賞するなど、その活躍は国を越えて評価されています。また先日は、村上春樹に続く第二回坪内逍遙大賞受賞というニュースもとびこんできました。

今回は、クラリネットのアドリブ演奏を交えた自作の詩の朗読に引き続いて、本学教員で芥川賞作家の諏訪哲史さんとの対談が行われました。補助椅子が出されるほどの盛況ぶり、学内外からたくさんの方々にご聴講いただきました。

各国で朗読を精力的にやっておられる多和田さんの口から発せられることは、日本語でありながら、音楽のように自由で、また建築のように構造的で、不思議な魅力をもたらしていました。

「小説は、小説論でなければならぬ」と同時に、詩でなければならぬ(「シエークスピアの作品にも、オリジナルがあったわけではなく、文学作品は変身したがついている。いまが過去に向かって影響を与えつついく(ドイツ語と日本語で書くことの新しい地平を中心に、大変刺激的な対談でした。)

- 高等学校・中学校PTA講演会
「ギフト・フロム・ザ・ハート」
- タレント・農学博士 ジョン・ギャスライト氏
- 11/10 センテナリーホール



著書にサインをするジョンさん(右)



瀬戸市の森に味噌だるの廃材を利用したツリーハウスを建て、木の上で生活しているカナダ出身のジョンさんを迎え、ツリークライミングを通じて自然と触れあい、その中で環境に対してやさしい心を育てること、また、日本と北米の文化を比較しながら、国際交流のあり方や教育子育ての話などを面白く話していただきました。ヘリコプターママ、潜水艦ババミサイルママが話題になった時は、会場は笑い声に包まれ、大いに盛り上がりしました。

ジョンさんはテレビ出演も多いため、よく知っているお母さん方は親しみを持って講演を聞かれたようで、1時間40分が短く感じられました。終了後の本の販売には行列ができるほどでした。

講演会後の茶話会では、和気あいあいとした雰囲気の中、役員の方々や親睦を深めることができました。

本講演では、全国的な学術情報流通での知的インフラ整備の立役者でいらつしやる雨森氏をお招きし、図書館ネットワーク構築の意義と機能についてお話を伺いました。雨森先生は、市域レベルから県内レベルへ進展した大学図書館相互利用ネットワーク、国立大学の図書館相互利用制度、全国国際レベルの学術情報システム、県域を超えた図書館ネットワーク、館種を超えた図書館ネットワークといった、あらゆるタイプのネットワーク構築に携わってこられました。そのご経験に基づき、異種機関の連携による情報サービスの効果、それを支える人の意識のあり方、さらに自ら行動を起こすことの重要性を明快にお話してくださいました。情報サービスに限らず何事においても、利用者のニーズを知り、それをふまえた構想実現のための理念を形成しなければ、本来目指している目的を達成することはできません。ご講演の最後に「目的を達成するためには、ミッション、ビジョン、バッション、アクションが不可欠」というメッセージを送ってくださいました。このことを実現された雨森先生に、穏やかなお人柄に秘められた情熱を感じたひとときでした。

- 文学部図書館情報学会主催
「図書館ネットワークその誕生と軌跡―」
- 元三重県立図書館長 雨森弘行氏
- 11/19 長久手キャンパス



学生時代のアルバイトのバスガイドから英語を使う通訳ガイドになったいきさつに始まり、20年以上の通訳ガイド、ツアー・コンダクターの目を通して見た様々な異文化を表情豊かに紹介していただきました。日本では当たり前のことが外国ではそうではない、外国人は日本人をこう見ている、海外にはこんな国もあるんだということ豊富な実体験をもとに話されました。日本の新幹線の偉大さ、和風旅館の使い方が、日本人が思いも寄らぬ反応を示す外国人を見て、日本を再認識するという例をいくつか示されました。

外国人に英語でどのように説明案内するのか実演もありました。英語の勉強の仕方じつとって英語ガイド、スペイン語ガイドの試験にパスしたか、また将来の自分のために、今、何をすべきか、人生の指針になるようなアドバイスもいただきました。

「日本笑い学会」の理事でもあり、バスの車内で外国人観光客を笑わせることに生きがいを感じる、今回の講演でもその本領を十分に発揮していただき、あつという間の90分でした。学生たちにとっても異文化理解だけでなく、将来を見据える良い機会になったことと思います。

- 文化創造学部多元文化専攻主催
「通訳ガイドウォッチング―旅が仕事の20年―」
- 英語・スペイン語 通訳ガイド 志緒野マリ氏
- 11/19 星が丘キャンパス



近年、保護者の「自己中心主義」が蔓延し、学校教師は無理難題（「イチヤモン」）を突きつけてくる保護者への対応に疲弊しています。講演では数々の驚愕する無理難題の具体的例の紹介と、対応法の要点が伝授されました。

小野田先生によれば、イチヤモン要求を、学校と保護者とのコミュニケーションの機会として積極的に活用することが重要であり、イチヤモン要求をする保護者を「モンスター」と呼称することは、学校が保護者とのコミュニケーション経路を断つことになるということです。無理難題要求にはそれぞれの背景があり、保護者の怒りの着火地点と爆発地点は異なることもあるので、保護者の思いと本音に寄り添いながら、解決の出口を見つける必要があると話されました。教師の善意のみで解決できない問題や、専門家（心理カウンセラーや弁護士等）の支援が必要な場合もあります。「教育は愛とロマン、そして理性」と総括される先生のユーモアと迫力に、聴衆は時間を忘れて魅了されました。

- 文学部教育学科主催
「モンスターペアレント論を超えて
～保護者と向き合う気持ちと共同性～」
- 大阪大学大学院人間科学研究科教授 小野田正利氏
- 11/23 長久手キャンパス



留学すれば外国語の習得はなんとかなるか、そうはいかないと、NHK教育放送、テレビ中国語でおなじみの愛知大学教授荒川氏は静かに強調して、満員の会場は波を打つたように、たくさんの方が耳を傾けました。

氏は自らを留学できなかった最後の世代だからと、中国語だけでなくドイツ語、朝鮮語フランス語など、英語とともに外国語を習得した、ご自身の経験を話してくださいました。留学するなら問題意識を持つこと、出かける前には文法を日本でしっかりとやっていると、出かけるのがよいと、またネイティブの方と接すると、会話の時間を多く作って、聞いたことをメモに書きとめて表現を学んだノウハウを披露されました。言語に興味と関心を抱く学科の学生たちが熱心に聞き入ったすばらしい講演でした。中国の街角の看板を写真資料に、とても興味のあるひとつずつのお話にはとても感心しました。

荒川氏は愛知大学孔子学院長を勤めておられ、その要職のとおり、人徳あるにこやかな先生にとても親しみを感じたひとときでした。

- コミュニケーション学部
言語コミュニケーション学科主催
「体験的外国語の学び方」
- 愛知大学教授 荒川清秀氏
- 11/21 長久手キャンパス



LECTURE

講演会報告

- 文学部国文学科企画・国文学会運営 文学部講演会
「古典文学ゴシップ・スクラップ
―柿から生まれた男のはなし―」
- 甲南大学教授 田中貴子氏
- 12/4 長久手キャンパス



田中先生のご専門は中世日本の説話、仏教文学。悪女・妖怪といった興味深いテーマや古典教育に関する数多くの著作が示すように、専門分野にとどまらず、さまざまな方面でご活躍になつています。

今回の講演会では、百人一首の「あしひきの」でも有名な歌人、柿本人麻呂にまつわるゴシップをとりあげながら、古典を読む楽しさを語ってくださいました。西暦700年前後を生きた人麻呂の実像はほとんど不明ですが、柿から生まれた、天皇の后と不倫して流刑に処された、といった後世の伝説があることには驚いた人も多かったと思います。「万葉集」から現代のミステリー小説まで、日頃なじみのないものも含めてたくさんさんの書名が出てきましたが、スライドを用いて大変わかりやすくお話しいただいたので、学生も古典に対する関心を深めることができました。

3、4年生の参加しにくい時期の開催となつてしまい、来場者はやや少な目の100人ほどでしたが、先生は終了後も学生の質問に気さくに応じてくださり、とても貴重な時間を過ごすことができました。

- 文化創造学部多元文化専攻主催
「僕たちは世界を変えることができない？」
- 日本医科大学医学生
葉田甲太氏
- 12/4 星が丘キャンパス



葉田さんは現在、東京の日本医科大学5年生で、2年時に「楽しくボランティアをモットーにクラブでチャリティイベントを行い、カンボジアに小学校を建設し、その後自著『僕たちは世界を変えることができない。』」を出版されました。

今回の講演会では、そのカンボジア小学校建設時に学んだ、カンボジアの識字率の低さや医療技術の遅れ、エイズ患者に対する差別などを写真や映像を使って話していただきました。日本から5時間しか離れていないカンボジアで起きている現状を目の当たりにし、自分の世界の狭さや自分がいかに恵まれていたことに気づいたそうです。

葉田さんは、「若いうちは失敗してもいい。年をとってから失敗すると批判され、成功しても普通だと言われる。若い時に失敗しても若いから仕方ないと言われる、成功したらすごい褒められる。だから、今の時間を大切にしよう」と話されました。そんなメッセージに学生たちは、「パワーをもらった」「小さなことでもやってみようと思った」「自分が変われば世界も変わっていくと思った」など、それぞれに何かを感じ取ったようです。何よりも同じ学生からの話は身近に感じられ、強い刺激となった講演会でした。

- 人権擁護委員会主催
2009年度ハラスメント防止講演会
「大学におけるハラスメントの防止と対策」
- 広島大学 ハラスメント相談室 准教授 北仲千里氏
- 12/8 長久手キャンパス



本学で「ジェンダーと社会」等の非常勤講師をしていただいたことのある広島大学の北仲先生をお招きし、「大学におけるセクシャルハラスメントの防止と対策」というタイトルで講演を行いました。当日は、事務職員、教育職員あわせて80名が参加しました。講演は、前半がセクシャルハラスメント、後半がアカデミックハラスメントに関するもので、いずれも具体的事例が多く紹介され、分かりやすいものでした。

特に興味深かったのはアカデミックハラスメントの相談件数が近年急増している点です。この原因として、学生の多様化、余裕のない職場環境、所属意識のない職場などが挙げられていました。

本学では現在までのところ、アカデミックハラスメント問題について目に見えた増加はないかもしれませんが、しかしここ数年で大学の規模が拡大していることを考えるとアカデミックハラスメントを引き起こすすべての要因が本学には潜んでいることは否定できません。教職員それぞれがこのような研修から多くのことを学ぶだけでなく、大学組織全体で危険要因をなくす努力が必要だと感じました。

- 文化創造学部 2009年度文化創造フォーラム
「拡大欧州の内と外
～冷戦終結20年、取材で出会った不法移民たち～」
- 朝日新聞記者外報部記者 喜田尚氏
- 12/11 星が丘キャンパス



旧ソ連や東欧の国々までもが続々とEUへと加盟し、冷戦終結後の平和をひたすら謳歌しているかに見えるヨーロッパですが、移民や少数民族といった問題に着目してヨーロッパ諸国を眺めてみると、そこには最近になって新たに立ち現れてきたある種の「不穏さ」が見えてきます。

シェンゲン協定によりヨーロッパ諸国間の行き来が自由になったために結果的にヨーロッパの外からの移民が急増し、特にイスラム諸国からの移民への反感がヨーロッパ全体に浸透しつつあることもそのひとつです。また、そうした「外からの異民族」への反感が、「内在する異民族」であるロマ（ジプシー）への迫害の端緒となつてしまったこともそのひとつです。

こうした最新のヨーロッパ事情について朝日新聞外報部記者の喜田氏（モスクワ支局員、ローマ支局長などを歴任し、ヨーロッパ、旧ソ連、中東地域で民族問題や地域紛争を数多く取材）に講演していただきました。ご自身の取材経験と自ら撮影された貴重な映像を交えた熱いお話に学生たちは興味深く聞き入り、国際ジャーナリストの実際の仕事ぶりに圧倒されていたようでした。